

開鐘

# KE-JOU

沖縄県立芸術大学広報誌「開鐘」第19号

 沖縄県立芸術大学  
OKINAWA PREFECTURAL UNIVERSITY OF ARTS



<http://www.okigei.ac.jp>



三線 富盛開鐘 附贈 県立芸術大学所蔵

## 開鐘 (KE-JOU)

開鐘とは、明け六つの開静鐘の優雅な音にたとえられた三線の尊称です。  
沖縄県立芸術大学も開鐘のように  
遥か彼方まで鳴り響き、  
世界に向かって飛躍する拠点となることを願い、  
広報誌を「開鐘」と名付けました。

沖縄県立芸術大学 広報委員会

2017年5月15日発行

## 特 別 寄 稿

### 高良倉吉 琉球大学名誉教授

沖縄県立芸術大学は創立30周年を迎えました。芸術総合大学として次代を担う役割の重要性を再確認し、教育・研究・社会貢献に邁進すべく決意を新たにしたところです。この「開鐘」の巻頭特集は、多方面から沖縄の芸術の発展に寄与してこられた高良倉吉氏の思いを聞き、今後の芸術振興のヒントにしたいと企画しました。寄稿文をご一読いただき、より多くの方に県立芸大に関心を向けてもらえれば幸いです。

沖縄県立芸術大学 全学教育センター 麻生伸一  
写真 美術工芸学部 笹原浩造 撮影協力 ザ・ナハテラス



## ソフトパワーとしての

## 県立芸大への期待

高良倉吉（琉球大学名誉教授・琉球史）

個人的な思い出を記しておきたい。

沖縄県立芸術大学が開学した1986年の後学期、私は週2回（水曜日・土曜日）、非常勤講師として琉球史の科目を担当した。私は沖縄県教育委員会に属する沖縄史料編纂所の職員だったのだが、県職員の身分でありながら県立大学の講義を担当したことになる。公務員の勤務形態としてはふさわしくない行為であり、苦肉の策として、毎回「職専免」と称される手続きをとり、県立芸大に通った。その結果、職場の私の出勤簿は印鑑だらけの分厚いものになってしまった。

実は、県立芸大の設置申請書が当時の文部省に提出された際に、書類の中に非常勤教員として私の名前が記載されていた。県の担当職員から話があったので、名義貸しのつもりで同意していたが、開学後に文部省の検査が入り、この者は講義の実績がないではないかと指摘され、あたふたと講義に及んだということだったのである。しかし、開学当初の講義を持つことができたのは幸運だった。1期生に当たる学生たちは私の拙い講義を熱心に聴いてくれたが、何よりも、沖縄の地に誕生した芸大の歴史を、これから自分たちが創るのだという意気込みが感じられた。講義を終えると、何人もの学生が私を取り囲み、質問を浴びせてきた。そして4年後に、その

学生たちの代表が私の職場（当時は浦添市立図書館）を訪ねてきて、ぜひ卒業パーティーに出席して欲しいと声をかけてくれた。そのパーティーは、泊港から船をチャーターし、夜景を楽しみながら懇談する粋なイベントだった。

一度限りの非常勤講師を勤めたあの年から、30年の歳月が過ぎた。この間、県立芸大は着実に発展し、美術工芸・音楽の2学部に加え大学院（修士・博士）、附属図書館、芸術資料館、附属研究所などを持つ大学にまで成長した。そして、沖縄発の日本および世界向けの人材を育成し、多くの卒業生を世に送り出してきた。県内の大学の中で、他の大学とは異なる独自性を発揮する存在にまでなったのである。

そのことを十分に評価したうえで、老衰心ながら若干の所見を述べさせていきたい。県立芸大が建学の理念で述べているところの、「沖縄文化が創りあげてきた個性の美と人類普遍の美を追究する」というコンセプトに係る課題の一端についてである。

結論から先に言えば、県立芸大のメインキャンパス（首里当蔵キャンパス）の立地するその場所が、個性と普遍に関するメッセージをすでに帯びていることに深く着目して欲しい。

周知のように、県立芸大に隣接する龍潭とその一帯は、1427年に完成した首里城の外苑エリアであった。造園事業を指揮したのは、当時の首里城の王に仕えていた中国人、懐機という人物だった。芸大に南接する円覚寺跡は、琉球を代表する禅宗寺院であったが、その寺を開いたのは京都の南禅寺から来た僧侶（芥隠）だった。そして、芸大のメインキャンパスは、王国の最高学府である国学のあった場所であり、その隣には、儒教の聖堂ともいえる首里孔子廟があった。

王国が滅び、沖縄県の時代がスタートすると、その場所は沖縄県師範学校の校地になった。近代の沖縄県には大学などの高等教育機関は設置されなかったので、師範学校が最高学府の一つだった。そして、沖縄戦が終わりアメリカ統治時代が始まると、その場所は沖縄初の大学である琉球大学の男子寮として活用された。さらに付け加えると、砲煙弾雨が飛び交うあの沖縄戦において、芸大とその周辺は、かけがえのない歴史・文化遺産が消滅した過酷な現場となった。

つまり、県立芸大は、県内の他の大学が立地する場所とは異なり、多くの歴史的な記憶が重層する場所なのである。

首里城の王に命じられて龍潭とその周辺を公園として整備した機は、中国に戻り、各地の名園を見聞したうえで帰国し、整備事業を実施した。円覚寺は単なる寺院だったのではなく、王国のエリート層が日本の学芸に触れる一種の学び舎でもあった。国学や孔子廟の時代においては、中国の古典を学ぶのは当然として、中国語(官話)の習得や中国語による外交文書の作成も学んでいた。

師範学校や琉大男子寮で青春の一時期を過ごした若者たちは、それ以前の近代の時代とは異なり、沖縄の「中心」(首里・那覇)の者たちのみではなく、ヤンバルや宮古・八重山、奄美などの若者たちも数多くいた。つまり、それ以前の時代にはなかった開かれた教育の場だったのである。

そういう多層な時間が詰まった場所が、県立芸大のメインキャンパスなのである。そのメッセージをどのように受け取るべきだろうか。もう一つのメッセージは、琉球王国におけるソフトパワーの問題である。

よく知られた話なのだが、王国の改革に取り組んだ指導者、羽地朝秀は、1667年に、首里城の王に仕える人材の要件として以下のことを求めた。

学問を修め文章を書く力があること。算数・計算能力があること。医業の知識があること。調理のたしなみがあること。乗馬ができること。唐楽(中国芸能)の素養があること。茶の湯のたしなみがあること。生け花のたしなみがあること。など。

興味深いのは、武道に関する項目がなく、また、地元琉球の文化的素養についての規定もない。役人としての基本的な学力に加えて、

中国や日本の文化・素養を身に付けていることを求めているのである。当時の琉球は常備軍を持ってはならず、外交・貿易船(進貢船)が中国沿岸で海賊に襲撃された事態を想定した防衛能力に止まっていた。したがって、武道の項目は必要がなかったのかもしれない。

しかし、その後の歴史が王国の実相を説明してくれている。いわゆる「空手」が、琉球の人びと、特に首里や那覇などの都市部にいて心身を鍛錬する技として行われていた。さらに、中国皇帝の使節団(冊封使)を迎えて披露された琉球の音楽と芸能は、王に仕える男性の家臣たちが演じたものだった。また、首里城の王の名代として徳川日本の将軍のもとに派遣された使節団(江戸上り、あるいは江戸立とう)も、江戸城において琉球芸能を演じてみせた。男性の役人たちは、通常は行政の業務に従事していたが、必要なときは芸能者になったのである。

琉球という小さな王国を運営するスタッフである彼らは、「空手」の鍛錬を行う者があり、地元の芸能を演じると同時に、羽地朝秀が求めたような他国の文化もたしなんでいた。それは、軍事や経済ではなく、文化の力を通じて小国の存在感をアピールするソフトパワーだった。

文化や芸術は、その分野で閉じているのではなく、ある目的のために発信されるべき力を持つ。そのようなメッセージなのだとは私に理解する。

県立芸大は、これまで多くの社会貢献を行ってきた。そのことを承知のうえで言いたいのは、「さらに、県民の目に見える大学」を目指すべきではないだろうか。様々な自治体や組織と連携協定を結び、県立芸大パワーを発揮することが求められているのではないだろうか。

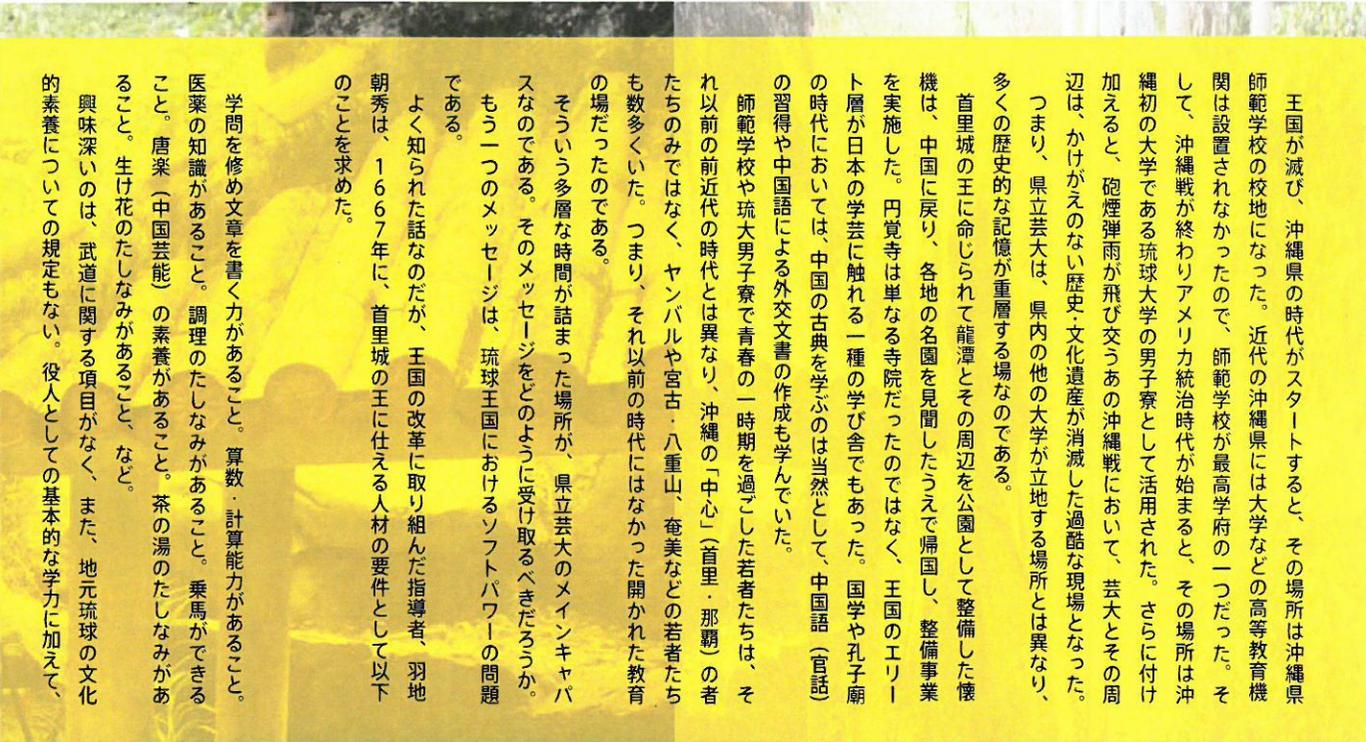
例えば、離島に住む人びとに対して音楽や芸能、絵画、彫刻、デザイン、工芸などの魅力を伝える継続的な事業を展開して欲しい。

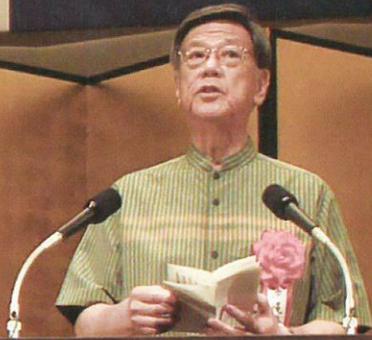
思い付きにすぎないのだが、伊江島において次のようなシーンが実現して欲しい。島の民謡をピアノやヴァイオリンなどの器楽で演奏し、音楽表現のゆたかさを島の人びとと共有できる演奏会があった欲しい。島のシンボルである伊江島タッチューをテーマに、様々な意匠やデザインの表現可能性を追求するワークショップを開催できないだろうか。そして、王国時代のできごととして伝承されているその島の物語を題材にした、創作の音楽や舞踊を披露して欲しい。それらの文化シーンを、県立芸大と伊江村、支援団体や組織のコラボレーションで実施できる日が訪れて欲しい。

また、沖縄県が検討している沖縄県立博物館の跡地、すなわち中城御殿(次の王になる者の屋敷)の復元にも県立芸大のスタンスで関与して欲しい。復元される中城御殿には、往時の建物を忠実に整備するエリアの他に、首里に住む人びとのために提供されるコミュニケーションセンターのような機能も構想されている。その小さな拠点を、県立芸大にも参画してもらい、首里というまちをどのようにクリエイティブにできるか、悩んで欲しいのである。

県立芸大は、地元出身の学生のみではなく、県外や国外から学びにきた有能な人材も多い。沖縄中心主義に陥るのではなく、多様な感受性や芸術方法の自由さを認め、そのうえで、沖縄という地域に対するソフトパワーとしての県立芸大の価値をアピールして欲しい。

あれから30年の歳月が経過したが、県立芸大は、そうしたことを行う実践力を持つ存在になったと思う。そのことを確信するがゆえに、愚見を呈する気分になった。





翁長雄志 知事の祝辞

# 開学30周年

## 記念事業報告

### 記念式典

開学30周年特別演奏会 大学奏楽堂

美術工芸学部 教員展 附属図書・芸術資料館

ハワイ大学等交流事業



ハワイ大学等交流事業 琉球芸能公演出演者

沖縄県立芸術大学は、1986年の開学から今日までに3400人を超える人材を輩出し、沖縄の豊かな芸術文化の伝統を受け継ぎ、新しい創造的芸術文化の形成及び発展を担ってきました。

2016年に本学は開学30周年を迎え、9月22日には記念事業が開催されました。

開学記念式典では、翁長雄志沖縄県知事の挨拶をはじめ、これまで大学運営に貢献された方々への表彰などが行われました。また式典にあわせ、近藤春恵教授が作曲した「Sui-gushiku」が演奏されました。



開学30周年記念 典・記念演奏

80周年典演奏

開学30周年記念演奏

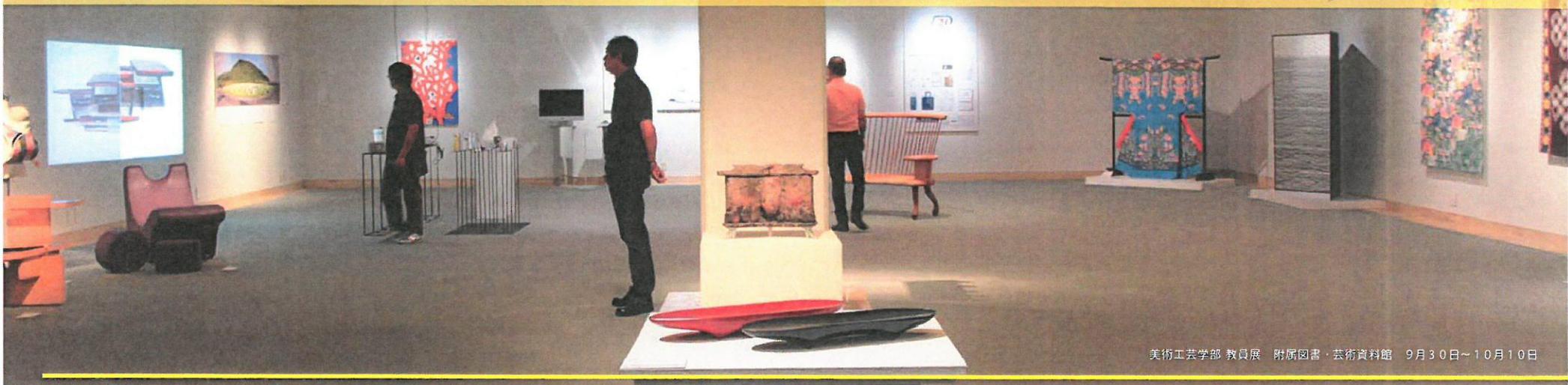
作曲 近藤 春恵 (沖縄県立芸術大学 教授) 指揮 樋本 英一 演奏 沖縄県立芸術大学オーケストラ 沖縄県立芸術大学ヴォーカルアンサンブル 沖縄県立芸術大学琉球古楽音楽コース

「世界で活躍する卒業生&SUUGUSHIKU」と題した記念特別演奏会が9月23日に開催されました。樋本英一氏の指揮のもと、ソプラノの松田奈緒美氏（本学一〇期生）やクラリネット奏者の川上一道氏（本学一二期生）と沖縄県立芸術大学オーケストラが共演しました。

演奏会では「交響的断章 Suigushiku」と「管弦楽、合唱、琉球楽器の為の Baccanale」などが演じられました。「管弦楽、合唱、琉球楽器の為の Baccanale」は沖縄の民謡「谷茶前節」をアレンジしたもので満員のなか演奏されました。

また、沖縄県立芸術大学 美術工芸学部・大学院造形芸術研究科教員作品展9月30日から10月10日、沖縄県立芸術大学 附属図書・芸術資料館にて教員作品展が開催されました。教授、准教授、講師助教、助手、教育補助専門員、技術専門員の合計37名の作品が展示されました。美術工芸学部は、漆芸コース開設し、日本画から初の実技系の博士課程認定を輩出するなど教育研究機関としての役割を拡大し、これまで1700名を越える人材を輩出してきました。今回の展覧会は、開学以来30年の研究成果をいっせいに披露し、今後の活動を展望する機会となることをめざし開かれました。日程中、おおくの方にご来場いただきました。

その他、「繋がる芸能ー沖縄台湾、ジャワ、バリ」と題するガムラン演奏会といった開学三〇周年記念イベントを開催し、これまでの研究・教育の成果をひろく紹介しました。





藍染めワークショップ



東西センターで地元の方々と



琉球芸能ワークショップ



織あそびワークショップ



しまくとぅばワークショップの子どもたち

本学開学30周年および沖縄県と米国ハワイ州姉妹提携30周年を記念して、ハワイ大学、東西センターなどハワイ州の学術機関等との交流事業が開始されました。  
 2016年度は、  
 ・ハワイ大学マノア校交流協定の締結  
 ・琉球芸能公演  
 ・琉球芸能ワークショップ開催  
 ・工芸ワークショップ開催  
 ・沖縄学・しまくとぅば研究交流が実施されました。ハワイ在住の沖縄県系移民の方をはじめ、多くの方にご来場いただき、沖縄の多彩な芸術・文化に触れてもらいました。また、研究機関との連携も深まり、研究・教育双方の面からの交流がすすんでいます。  
 本交流事業は沖縄県の「しまくとぅば普及推進行動計画」の一部でもあります。今後、ハワイにおける現地語（ハワイ語）の普及啓発事例を研究しつつ、「しまくとぅば」を利用した講義の立案、実施をすすめていきます。



企画展  
ポスター 早咲曼茶羅(部分)大嶺實清  
附属図書・芸術資料館



芸術学公開講座

本学では研究と教育の成果を社会に還元し、地域の方々の教養と文化の向上に寄与することをめざし、さまざまな地域貢献事業を実施しております。

2017  
年度

# 地域貢献事業 セレクト

数ある事業の中から一部を紹介します



移動大学 in 粟国島 空手教室 講師 佐久本先生 喜友名先生



飲酒撲滅キャンペーン 那覇警察署

デザイン専攻共同企画制作

# 2017年度演奏会

## ●音楽学部

- 6月 3日 (土) 館野 泉 特別講座「左手のピアノ音楽」 奏楽堂ホール
- 6月11日 (日) 第2回モーツァルトレクイエムコンサート 平和祈念堂
- 9月30日 (土) 奏楽堂演奏会(室内楽の夕べ)
- 10月13日 (金) 奏楽堂演奏会(木管五重奏演奏会)
- 10月14日 (土) 第28回 琉球芸能定期公演 沖縄市民会館大ホール
- 10月28日 (土) 第28回 洋楽定期公演 奏楽堂ホール
- 12月 9日 (土) 有森博×長瀬賢弘デュオリサイタル「ロシアの風 Vol.5」 奏楽堂ホール
- 12月16日 (土) 南城市伝統芸能祭 ～開闢から継承へ～ 南城市シュガーホール
- 1月21日 (日) 第23回オーケストラ定期演奏会 南城市シュガーホール
- 2月11日 (日) 奏楽堂演奏会(フランツ・シュミットの生涯と作品を巡って)
- 2月17日 (土) 第21回 室内楽定期演奏会 奏楽堂ホール

## ●附属研究所 公開講座・文化講座

- 4月12日 (水)～7月19日 (水) 琉球・沖縄芸術の構造
- 4月10日 (月)～7月24日 (月) 古文書を読もう。
- 5月19日 (金)・26日 (金) ラオスの織物と伝統
- 開催日未定 琉球・沖縄民謡の世界
- 開催日未定 ガムラン講座

# 展覧会 スケジュール

## ●美術工芸学部

- 4月21日(金)～26日(水) グループ展 そのほか そのほか そのほか
- 5月12日(金)～15日(月) ドローイングコミュニケーション展
- 5月19日(金)～24日(水) グループ展 2人展(仮)
- 5月26日(金) 油画 ワークショップ
- 6月21日(水)～26日(月) 個展 比嘉 光里 インスタレーション展(仮)
- 個展 有川 愛乃展(仮)
- 7月21日(金)～26日(水) 油画 卒制試作展
- 8月 2日(水)～6日(日) 彫刻専攻学部生展
- 8月23日(水)～27日(日) グループ展 国語辞展

10月13日(金)、20日(金)、27日(金) 芸術学専攻 教養講座

## ●全学教育センター おきげい教養講座

- 6月 1日(木) 曜変天目の謎をさぐる
- 6月22日(木) 学校から社会へー沖縄の地域社会／文化と若者(男性)の移行
- 7月20日(木) 冠船再考
- 7月27日(木) 組踊ー琉球文学の中の劇文学を考える
- 10月28日(土) 首里・まち・歴史ーロゲイニング大会
- 11月30日(木) 描画法による性格の理解ーバウムテストを中心に
- 12月14日(木) 英語多読への招待
- 1月25日(木) 島の成り立ちを語る生き証人:ミヤコサワガニとダイトウコオイエビ